

平成 27 年度

病虫害発生予察情報

第 17 号

長期予報

北海道病虫害防除所 平成 28 年 3 月 28 日

<http://www.agri.hro.or.jp/boujoshou/>

Tel:0123(89)2080・Fax:0123(89)2082

札幌管区気象台発表の 2 月 24 日付の暖候期予報および 3 月 25 日付の 3 か月予報は以下のとおりです。

北海道地方 3 か月・暖候期予報

(4 月から 8 月までの天候見通し)

暖候期 平成 28 年 2 月 25 日

3 か月 平成 28 年 3 月 25 日

札幌管区気象台発表

< 気温の各階級の確率 (%) >

4 月	20	30	50
5 月	20	40	40
6 月	20	40	40
6～8 月	30	40	30

■低い □平年並 ■高い

< 降水量の各階級の確率 (%) >

4 月	40	30	30
5 月	40	30	30
6 月	30	40	30
6～8 月	20	40	40

■少ない □平年並 ■多い

春（4 月）：北海道日本海側・オホーツク海側では、天気は数日の周期で変わるでしょう。北海道太平洋側では、天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多い見込みです。気温は、高い確率 50% です。

（5 月）：天気は数日の周期で変わるでしょう。気温は、平年並または高い確率ともに 40% です。

夏（6 月）：天気は数日の周期で変わるでしょう。気温は、平年並または高い確率ともに 40% です。

（6 月から 8 月）：太平洋高気圧の北への張り出しが弱く、北海道は気圧の谷の影響を受けやすい見込みです。一方で、大気全体の温度が高いと予想されることから、夏の平均気温はほぼ平年並で、降水量は平年並か多い見込みです。天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ曇りや雨の日が多い見込みです。エルニーニョ現象は夏には終息する可能性が高いでしょう。

上記 3 か月予報、暖候期予報および近年の発生状況からみた平成 28 年度の主要病害虫の発生予想は以下のとおりです。なお、病害虫の発生予想は毎月の気象予報にもとづいて修正し、毎月の予報（毎月末頃発表）、注意報として随時発表します。今後はこれらの予察情報を参考にしてください。なお、最盛期や評価時期が暖候期予報の期間から外れている病害虫については、長期予報に掲載していませんので、ご了承ください。

平成 28 年度の病害虫の発生予想

注1) 平年値(過去10年間の平均値)と比較し、◎:やや多～多、□:並、△:やや少～少を示す

注2) 近年の発生状況の()は、平年値がなかったため暫定的な評価

注3) 本年の発生期・発生量の()は、新規項目のため平年値なし

作物名	病害虫名	近年の発生状況					本年の発生期・発生量	
		23	24	25	26	27	発生期	発生量
水稻	いもち病(葉)	△	△	△	△	△	並	並
	いもち病(穂)	△	△	△	△	△	並	並
	紋枯病	□	◎	◎	◎	◎	並	やや多
	縞葉枯病	□	◎	□	△	□	—	やや少
	ばか苗病	□	◎	◎	□	□	—	並
	苗立枯病	—	—	△	△	□	—	並
	種子伝染性細菌病	—	—	△	△	△	—	並
	ニカメイガ	△	△	□	△	△	—	やや少
	ヒメトビウンカ	□	□	□	□	□	やや早	並
	イネドロオウムシ	◎	△	△	△	△	やや早	やや少
	アカヒゲホソミドリカスミカメ	△	△	□	△	△	並	並
	イネミギワバエ	△	△	◎	◎	◎	やや早	並
	フタオビコヤガ	□	□	□	△	△	並	やや少
秋まき小麦	赤さび病	△	△	◎	□	△	やや早	やや多
	うどんこ病	△	△	△	△	△	やや早	やや少
	眼紋病	□	△	△	△	△	—	やや少
	赤かび病	◎	□	△	△	△	—	並
春まき小麦 (春まき)	赤かび病	◎	△	△	△	△	—	並
	ムギキモグリバエ	—	□	◎	△	△	やや早	やや少
春まき小麦 (初冬まき)	赤かび病	△	△	△	△	△	—	並
	ムギキモグリバエ	—	—	—	(△)	(△)	やや早	やや少
大豆	べと病	□	□	△	△	△	並	やや多
	わい化病	△	△	△	△	△	—	少
	マメシンクイガ	◎	◎	◎	◎	□	並	並
	食葉性鱗翅目幼虫	□	△	◎	◎	△	並	並
	タネバエ	△	△	△	△	△	—	並
小豆	菌核病	△	△	△	△	△	並	やや多
	灰色かび病	△	△	△	△	△	並	やや多
	茎疫病	□	△	△	△	△	—	並
	食葉性鱗翅目幼虫	◎	□	◎	□	△	並	並
菜豆	菌核病	□	△	△	△	△	並	やや多
	灰色かび病	△	△	△	△	△	並	やや多
	黄化病	△	△	□	△	□	—	並
	タネバエ	△	△	△	△	△	—	並
ばれいしょ	疫病	□	□	△	△	△	並	やや多
	軟腐病	□	◎	□	□	□	—	並
	黒あし病	◎	◎	◎	□	□	—	並
	そうか病	□	□	□	□	□	—	やや少
	粉状そうか病	□	□	□	△	△	—	並
	アブラムシ類	△	△	△	□	◎	並	やや多

作物名	病害虫名	近年の発生状況					本年の発生期・発生量	
		23	24	25	26	27	発生期	発生量
てんさい	褐斑病	◎	◎	△	□	△	並	並
	根腐病(黒根病含)	◎	□	□	△	△	—	並
	西部萎黄病	—	—	—	—	(□)	—	(やや少)
	ヨトウガ (第1回)	△	△	◎	◎	△	並	やや少
	ヨトウガ (第2回)	△	△	◎	◎	△	並	並
たまねぎ	白斑葉枯病	□	□	△	△	△	並	並
	軟腐病	□	□	△	△	△	—	並
	乾腐病	△	□	□	□	△	—	やや少
	ハエ類(タマネキハエ、タネハエ)	◎	△	△	△	△	—	やや少
	ネギアザミウマ	□	□	△	◎	◎	並	やや多
	ネギハモグリバエ	—	—	—	—	—	(やや早)	(やや多)
だいこん	軟腐病	□	◎	◎	△	□	—	並
	キスジトビハムシ	□	□	□	△	△	—	並
あぶらな科 野菜	コナガ	△	△	△	△	△	—	並
	ヨトウガ	△	△	△	□	△	並	並
りんご	モニリア病	◎	△	△	△	△	並	やや少
	黒星病	△	△	△	◎	◎	並	やや多
	斑点落葉病	△	□	△	◎	◎	並	やや多
	腐らん病	□	□	□	□	◎	—	並
	ハマキムシ類	△	△	△	◎	△	やや早	やや少
	モモンクイガ	◎	△	△	◎	◎	やや早	やや多
	ハダニ類	△	△	◎	△	△	並	やや少
	キンモンホリガ	△	△	△	△	△	並	やや少

平成 28 年度に多発が予想される病害虫

1. 水稻の紋枯病

平成 24 年以降、道内では夏季が高温に経過し、本病の多発傾向が続いているが、近年は本病対象の防除が実施されていないほ場が多い。平成 28 年は夏季が並温傾向と予報されているものの、発生ほ場では伝染源の密度が高まっている可能性があり、注意が必要である。窒素肥料の多用を避けると共に、前年に発生が確認されたほ場では出穂前の薬剤散布を実施する。

2. 小麦の赤さび病

平成 28 年は 6 月まで高温少雨傾向と予報されており、本病の発生に好適な条件となる可能性が高い。主要品種「きたほなみ」は抵抗性「やや強」であるものの、近年多発生となる場合がみられている。そのため「きたほなみ」においても、止葉抽出期までに下葉に病斑が目立つ場合には、開花始における赤かび病との同時防除に加え、止葉抽出期から穂孕期に薬剤散布を行う。

3. 大豆のべと病

本病は、汚染種子由来の発病株から、多湿な条件でまん延する。平成 28 年は夏季が多雨傾向と予報されていることから、本病に好適な条件になる可能性が高い。健全種子を使用すると共に防除ガイドを参考に適切に防除を行う。

4. 豆類の菌核病および灰色かび病

平成 28 年の夏季は多雨傾向と予報されている。開花期以降、低温湿潤な条件が続くと菌核病および灰色かび病の発生が多くなると予想される。防除ガイドを参考に薬剤散布を実施する。耐性菌が出現している薬剤もあるので、薬剤の選択に注意する。

5. ばれいしょの疫病

平成 28 年は夏季が並温多雨傾向と予報されており、本病の発生に好適な条件となる可能性が高い。F L A B S を参考に適期防除をこころがけると共に、初発が確認された場合はすみやかに防除を開始する。また、ダブルインターバル散布を行う場合には同散布で効果が確認されている薬剤を用い、初発前から薬剤の散布を行う。

6. ばれいしょのアブラムシ類

アブラムシ類は高温少雨で発生が多くなる。平成 28 年は夏季が並温多雨と予報されているものの、6 月まで高温傾向と予報されており、発生量は早期から発生するジャガイモヒゲナガアブラムシを主体に平年よりやや多くなると予想される。アブラムシの種類によって薬剤の効果が異なるので注意し、防除ガイドに準拠して薬剤の散布を行う。

7. たまねぎのネギアザミウマ

本種は高温少雨で発生が多くなる。平成 28 年は夏季が並温多雨と予報されているものの、6 月まで高温傾向と予報されており、発生量は平年よりやや多くなると予想される。合成ピレスロイド剤に抵抗性の個体が広く確認されていることから、防除ガイドを参考に他系統薬剤の組合せによる防除を行う。

8. たまねぎのネギハモグリバエ

平成 25 年以降、たまねぎで本種が多発し、りん茎への幼虫の食入被害が大きな問題となっている。平成 27 年は、これまで被害の多かった地域では比較的発生量が減少した一方、従来被害の少なかった地域において被害が顕在化する事例もみられた。平成 28 年は、引き続き本種の越冬密度が高いと推測される。越冬世代成虫の発生する 5 月下旬から 6 月は高温が予報されており、早発および多発生が予想される。成虫は葉に縦に並んだ白い点状の食痕をつけるため、ナモグリバエなどの他のハモグリバエ類と区別が可能である。幼虫は葉の内部に食入するため、薬剤の防除効果が得られにくいことから、成虫食痕が確認されたらすみやかに防除を開始する。前年に被害が認められなかった地域においても、初発を見逃さぬようにほ場観察に努める。

9. りんごの黒星病

平成 26 年から、8 月以降に一般園においても本病の発生が認められている。平成 28 年は夏季が並温多雨傾向と予報されていることから、やや多い発生が予想される。8 月以降も本病に対する薬剤の散布を散布間隔が開きすぎないように行う。

10. りんごの斑点落葉病

近年、本病に感受性のデリシャス系品種が栽培されている渡島、留萌地方において多発傾向が続いている。平成 28 年は夏季が並温傾向と予報されているが、これまでの傾向からやや多い発生が予想される。なお、道内主要品種で本病に抵抗性とされる「つがる」において、本病に類似した葉の斑点症状が発生しており、本病と混同されているので注意が必要である。

11. りんごのモモシンクイガ

平成 27 年は、本種による果実の被害が多発し、越冬密度も平年より高いと推測される。平成 28 年は 6 月まで高温傾向と予報されていることから、本種の発生が早まるとともにやや多い発生が予想される。被害果の回収および水浸処理など耕種的防除に努め、防除ガイドを参考に薬剤の散布をおこなう。

発生量が平年より多めとなることが予想される上記病害虫の他、平成 28 年に特に注意を要する病害虫として示した「小麦のなまぐさ黒穂病」、「ばれいしょのジャガイモシロシストセンチュウ」、「てんさいの西部萎黄病」、「あぶらな科野菜のコナガ」の発生状況にも注意し、適切に対応してください。